

氏名(本籍)	お <sup>くま</sup> 熊 <sup>さちこ</sup> 佐智子 (神奈川県)		
学位の種類	博 士 (芸術学)		
学位記番号	博 甲 第 4457 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	山中商会の研究 －アメリカにおける活動とその影響－		
主 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	中 村 伸 夫
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	五十殿 利 治
副 査	筑波大学助教授	Dr. phil	長 田 年 弘
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	宮 本 陽一郎

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は大阪を拠点として骨董商から東アジア美術全般を扱う画商に成長して国際的にも広く知られるようになった山中商会、とくにアメリカにおける発展の中核を担ったニューヨーク支店を中心に、1890年代の進出期から太平洋戦争期の閉鎖までの諸活動について、多面的な考察を加えるものである。

本研究の狙いのひとつは、近代における美術商の研究である。美術史研究において、画商や画廊の研究は必ずしも十分に展開をしている分野とはいえない。顧客に関わる基本情報の入手ひとつをとっても難題となることは容易に予想されることであるが、発注に関わる往復書簡などは、まさに作品解釈を左右するものであることから、今後もこの分野での研究の重要性が増すであろう。本研究も概していえば、美術史に直接関わる山中商会の位置づけを目指すものである。

さらに、本論では、山中商会における美術加工品の製作と販売というような、東洋美術作品の売買のみにとどまらない側面にも着目し、とりわけアメリカにおける受容を世紀転換期以後の消費行動と関連づける視点を打ち出し、美術商の社会的な位置を検討する。

本論は序章、第一章から三章、終章、そして関係資料や参考文献等から成っている。

序章では、まず本研究の目的と意義について、先行研究を紹介し、その問題点を指摘しつつ、アメリカの公文書館所蔵資料等に基づく実証的な調査研究に基づいて山中商会を研究することを確認する。

第一章「山中商会の設立とアメリカにおける胎動」においては、同商会の設立から1917年初代社長山中吉郎兵衛の死去までの時期を対象として、山中定次郎という人物を粗描し、1894年アメリカに自ら赴いてニューヨーク支店を開設して成功を取めた経緯を検討する。定次郎の経営センスや人的コネクションがアメリカでの顧客開拓につながったとする。またアメリカにおける東アジア美術受容について概観し、それに呼応するようにニューヨーク支店を皮切りに、ロンドンやボストンの支店も開設される経過を考察する。

第二章「『総合東洋美術商社』としての活躍－仏像、屏風から石灯籠まで」では、1917年から山中定次郎死去の年1936年前後までの時期について、山中商会が扱った商品について、アメリカ社会での受容という視点を踏まえつつ、考察を加える。山中商会は、顧客としてアメリカ各地の美術館・博物館、さらにロックフェラー三世らの個人コレクターを抱え、書籍発行や展覧会開催によりアメリカにおけるアジア美術のコレ

クシオン形成と評価に大きく関与している。学者を支援するメセナの活動にも熱心であった。一方、一般向けにより安価な美術加工品を製作販売していた。それは電気スタンドや玉製の杯であり、国際的な分業体制で作製され、頒布されていた。ニューヨーク支店は大衆的な新聞雑誌に取り上げられて、市民にも共有される美術鑑賞の場であった。さらに、山中商会ではアメリカに、美術工芸品にとどまらず、動植物（盆栽から金魚まで）を、換言すれば「自然美」を輸出していたことについて明らかにされる。

第三章「定次郎以後の山中商会と日米開戦」では、1936年山中定次郎死去の年から戦争により活動停止に追い込まれた1944年までの時期について述べる。日米開戦により、山中商会はアメリカ政府管理下に置かれ、ついに閉鎖される。その間、アメリカの三支店は協定を結び、体制を変えながら、ボストン美術館の所蔵作品の売却に関わるなどの活動を展開した。その後、開戦により、支店の閉鎖や商品差し押さえがあったが、従来言われてきたこととは異なり、実際には営業活動はそのまま継続された。そして1944年のオークションにより山中商会は在庫の大半を処分することになったことが明らかにされる。

結章では、これまでの議論をまとめるとともに、アメリカの消費ブームにおいて一種の「リゾート」と化したギャラリーとしての山中商会の位置を定める。

さらに、資料として、まず山中定次郎研究の基礎文献である『山中定次郎伝』（1936年刊）について『山中定次郎伝』における『山中定次郎』の表象」と題して文献批判を行う。ついで、関連年表、山中定次郎関係記事一覧、ニューヨーク支店その他での展覧会一覧、アメリカ国立公文書館所蔵の山中商会関係資料目録、最後に図版が付される。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本近代美術史という枠組みにおいては、ほとんど正面から取り上げられなかった美術商の活動という課題に、アメリカにおける東アジア美術受容への貢献という新たな視点を加味しつつ挑戦し、画商につきまとう毀誉褒貶の議論を慎重に避けて、客観的な立場からアプローチし、所期の成果をあげたことがまず評価される。

山中商会関係者の遺族の協力を得て入手され、公刊された資料はまことに貴重であるし、またアメリカでの調査もアメリカ国立公文書館蔵資料など基礎的な資料を発掘するなど、研究に対する真摯な姿勢が伺われる。

近代画商の研究は、特定の作家との交流という視点、その作家の作品の流通という視点で行われる場合が多いが、山中商会のように、近代における古美術品の流通に関わる場合、従来とは異なる取り組みが必要である。本論文はその点でも、美術加工品製作と販売、動植物の販売など、美術商が社会と関わり合うルートが美術作品販売以外にもさまざまあったことを明らかにしており、注目される。

本研究は実証的な研究を目指しつつ、単なる事実の羅列にとどまらず、とくにアメリカ社会における消費行動との関連を探っている。こうした研究課題については、十分な説得力をもって議論が展開できたとは言いかねる面もあるが、基礎研究との兼ね合いから無理からぬところである。

本論文については、19世紀アメリカにおけるジャポニスムとの関連、ボストン美術館にいた岡倉天心の「アジア」認識との関係、さらには日本の美術商から東アジア美術商への変身という問題点について、さらに考察する余地が残されているが、しかし、全体としては広範な資料収集と丹念な解読に基づき、独自の考察を加えた論文として高く評価できるものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。